

調査研究部会報告③

S.R.ランガナタンの学校図書館思想と教育観

-特に学校図書館司書とその実践について-

吉植 庄栄

1. 本稿の経緯

去る平成27年12月4日(土)に筆者は琉球大学教育学部に招かれ、沖縄県図書館協会調査研究部会研究会にて本稿のタイトルと同じ「S.R.ランガナタンの学校図書館思想と教育観」というお題で、お話しをさせて頂いた。当日は、筆者のインド渡航時の経験を時折取り混ぜながら、前半には『図書館の五法則(以下、五法則)』、後半には『教育観』と『学校図書館思想』についてお話しした。

本稿は、前半部分が当日の内容の要約であり、後半は拙稿「S.R.ランガナタン"New Education and School Library"に見られる教育の概念と学校図書館観(以下「New Education」)¹」には詳述しなかった学校図書館司書とその実践について、ランガナタンの考えを紹介するものである。

2. S.R.ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan, 1892-1972) 略年譜

- 1892 英領インド帝国マドラス州(現タミルナドゥ州) シヤリに出生
- 1917 修士終了後、数学の教師として大学で働き出す。
- 1924 マドラス大学図書館の図書館長に就任、イギリスに留学

- 1928 マドラス図書館協会設立、事務局長に就任
- 1931 『図書館学の五法則(The Five Laws of Library Science)』刊行
- 1933 インド図書館協会設立に協力
- 1945 ベナレス・ヒンドゥー大学に異動
- 1947 デリー大学に異動(1949まで)
※インド独立
- 1950 (このころ、アメリカを中心に世界各国で講演)
- 1955 息子が住むスイスのチューリッヒに拠点を移動
- 1957 インドに帰国。政府から名誉称号パドマシュリーを受ける。
『図書館学の五法則』第2版刊行
- 1958 日本に来訪
- 1962 ドキュメンテーション研究訓練センター(DRTC)名誉教授
- 1963 サラダ=ランガナタン図書館学基金設立
- 1972 死去 享年80才

3. 『図書館学の五法則』について

学校図書館観と教育観に立入る前に、ランガナタンの図書館思想の出発点である『五法則』について簡単に紹介する。

3.1. 『図書館学の五法則』

第一法則：BOOKS ARE FOR USE (本は利用するためのものである。)

¹ 拙稿「S.R.ランガナタン"New Education and School Library"に見られる教育の概念と学校図書館観」『教育思想』42, 2015, pp.19-48.

第二法則：EVERY READER HIS BOOK (いづれの人にもすべて、その人の本を。)

第三法則：EVERY BOOK ITS READER (いづれの本にもすべて、その読者を。)

第四法則：SAVE THE TIME OF THE READER (読者の時間を節約せよ。)

第五法則：LIBRARY IS A GROWING ORGANISM (図書館は成長する有機体である。)

3.2. 『五法則』が創られた背景

数学教員であった S.R.ランガナタンは、1924 年 1 月に周囲の奨めでマドラス大学図書館長職の公募に応募し、多数の候補者の中から選抜された。ところが仕事は退屈で、図書館を訪れる利用者は 12 人を越えることが減多になかった。そんな環境に幻滅し、彼は数学教員に戻ることを強く希望した。しかしこの後、英国派遣が決まる。

1924 年 10 月、ランガナタンは英国に渡航した。滞英中、図書館学の理論を学び、多くの図書館を見学した。その体験の中で、経験則による運営がなされがちな図書館業務の背後には何かしら法則のようなものがあるのではないかと考えはじめる。1925 年 7 月にマドラスに戻ったが、訪英前と一変し図書館の仕事に情熱を注ぐようになる。マドラス大学図書館を充実させる業務に忙殺される傍ら、無意識に規範原理を考えていた。1928 年も終わりが近くなったある日、五法則がランガナタンの頭に閃き、その後、講演や講座にてこの五法則を発表し始め、1931 年彼が 39 歳の時に *The Five Laws of Library Science* の初版を刊行した。1957 年には大幅に改訂し、第 8 章「科学的方法、図書館学とその進展」を加筆した第 2 版を刊行している。

3.3. 図書館業務での位置づけ

ランガナタンは、図 1 のような「図書館業務の基盤にあり、支えるもの」としての「五

法則」イメージを示している²。この図での「五法則」は、仏塔（の如きもの）を支える、基盤の岩から生える地中の五本柱となっている。この仏塔は図書館業務を表わし、「図書の見出し業務」「雑誌業務」「図書維持業務」「分類業務」「目録業務」「レファレンス・サービス」を経て「貸出業務」に到る計 7 段の塔として示される。

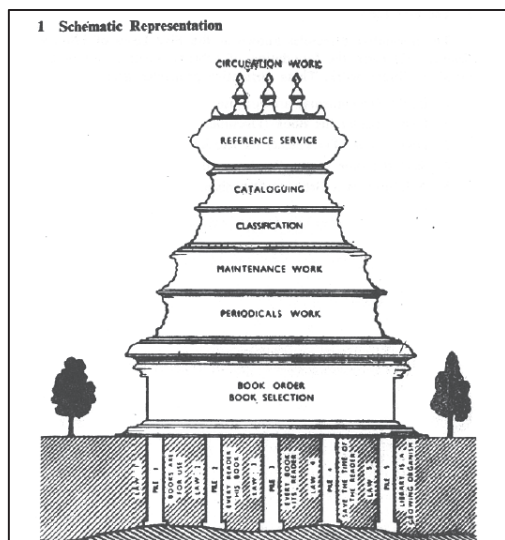


図 1：五法則と図書館諸業務の構造³

興味深いのは、この仏塔の 1 階に位置するのが「選書」である。ランガナタンによると「選書」で失敗すると、図書館は誰にも使われなくなってしまい、その結果、第一法則～第三法則に反することになる、としている。そのため図書館業務で、最も重要で基盤である業務は「選書」なのである。

² あくまでも『五法則』は、「図書館業務」の原理を示したものであり、よく誤解されているような「図書館自体」の本質を示したのではないことに、注意して頂きたい。

³ S.R. Ranganathan ; assisted by P. Jayarajan, *New education and school library*, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4) , Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, p.303.

4. 各法則の解説

4.1. 第一法則<<本は利用するためのものである>> Books are for use.

図書館の歴史を遡ると「本」というものはかつて貴重な存在であることから、「保存」するものであり、「できるだけ見せないようにするもの」であった。その後の印刷革命によって本は大量生産が可能になった。そして「本は利用するためのもの」へと時代は変わり、それを背景として第一法則が広がるのである。

第一法則が広まると、できるだけ本を利用してもらうため、図書館は人が一番集まる場所に建てるのが最良で、開館時間はできるだけ長く、という事になる。内装も、保存を第一と考えれば、効率的に収納する倉庫のような書庫、狭い通路が理想であったことに對し、人が大人数出入りして読書を楽しめる広い空間、書架と書架との間の広い通路、手の届く高さの書架が必要となる。

図書館職員の性質も、保存を旨とした時代は倉庫番を務められる者、いわば誰でも就ける職業であったことに對し、本を利用させる職業と変化する。そのため本を深く知り幅広い学識と教育者としての性質が必須となる。ランガナタンの理想は、図書館職員とは専門教育を受けた、行政能力と広い範囲の知識を持つ者が就く仕事であり、そのような人を集めるためには俸給を厚く遇せねばならないとしている。

4.2. 第二法則<<いずれの人にもすべて、その人の本を>> Every Person His or Her Book.

この第二法則は、「民主主義」の発展と国民全員が教育を受けるという「義務教育制度」の発展と大きく関わっている。

最初に検討されていることは「いずれの人にもすべて、その人の本を」について何故、その様に言えるかである。そのためにはまずそもそも「図書館とは何か？」を考えねばならないとしている。ランガナタンによると「図書館とは」第一法則から導き出した結果、「利用するために構成された本の集積」と定義している。また本とは、利用されることで「情報」を伝達し、読んだ本人を教育するもので

ある。ゆえに本は教育的価値を持つもので、教育の道具と考える事ができる。とすると、「いずれの人にも教育を」という近代以降の公教育の概念が背景にあれば、第二法則「いずれの人にもすべて、その人の本を」であるべきである、と述べている。

4.3. 第三法則<<いずれの本にもすべて、その読者を>> Every Book Its Reader.

第三法則は第二法則を「本」を主語にして、逆にしたものである。そもそも「本」は自分からは動くことができないので、「本」が自分を欲している読者に会えるかどうかは、図書館職員の読者に結び付ける仕事に大きく左右される。この法則では主に図書館で図書館職員が「本」を読者と出会わせる工夫について説明される。具体的には開架制、排架法、目録、レファレンス・サービス、図書館入口に新聞雑誌室を置くこと、広報、普及サービス、本の選択（選書）である。

4.4. 第四法則<<読者の時間を節約せよ>> Save the Time of the Reader.

閉架書庫は、いかに利用者の時間を空費するかを論じ、この空費は現金に換算すると本の亡失以上の損失であり、国民経済の観点からも望ましくないこととしている。利用者の時間の空費を図書館員は、可能な限り避けなければならないとし、利用者がその人の本に至るまでの「物的」「人的」支援に力を入れねばならないと訴える。

利用者への「物的」支援には、排列法、目録法、書誌類の整備、利用者目線の書架の配置、充実した館内サインなどが挙げられる。「人的」支援とは、レファレンス・サービスのことである。このサービスを充実させるために、図書館職員の仕事の簡素化・効率化・重複業務の集約化を行うことで時間を節約し、空いた時間をレファレンス・サービスに仕向けるようにせねばならない。

4.5. 第五法則<<図書館は成長する有機体である>>A Library is a Growing Organism.

「成長する有機体」については4つの意味がある。「大きさ」の変化（蔵書の増加、利用者の増加、館員の増加）、「変容と進化」（図書館の発展による性質の変化）、「種の形成」（図書館種の系統発生）、「協調する図書館群」（同じ館種の協力関係）である。

一方、ランガナタンは図書館が成長しても、変わらないものがあると言う。それは「図書館がすべてに通じる教育の手段(instrument)であり、教育に役立つすべてのものを集め、自由に伝達し、これらの手段とともに知識を伝播する」ことである。これは全ての図書館に内在するいわば「内なる人」であり、「永遠でありすべてに行き渡り、断固として不動、そして常に同じである。」と締めくくっている。

5. 『新教育と学校図書館(New Education and School Libraries)』の概要

続いてランガナタンの学校図書館に関する著作である『新教育と学校図書館(New Education and School Libraries) (以下『新教育』)』についてその概要を紹介する。当著作は、ランガナタンの教育思想がよく表れている。

5.1. 『新教育』について

ランガナタンは、数学教師時代に学校教育の現場経験があり、図書館員になっても、学校図書館についての講義を教育大学で持っていた。これらの長年の経験と研究をまとめ、1942年にマドラス図書館協会から“School and College Libraries”を刊行した。これを内容・タイトル共に大幅に改訂して1961年に第2版として刊行したものが『新教育』である。『新教育』は、初版に比べるとタイトルに“New Education”とあるように、世界的に流行した新教育⁴の教育思想を前面に打ち出し

⁴ 「広くは旧来の教育の克服を旨とする新しい教育の試みを意味するが、とくに19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米先進諸国を中心に世界的に広がった教育改革運動の全体をさす。(中略)多様な理論と実践からなるが、およそ、「児童から」vom kinde aus という象徴的

ている。

5.2. 『新教育』の構造

『新教育』は、5部構成である。新教育の立場から教育というものを考察し、その中で学校図書館が果たす役割を論じている箇所(Part B-E)、続いて学校図書館に焦点を移し、学校図書館の構成要素の分析(Part F-J)と学校図書館では何をすべきかについて(Part K-N)を検討する箇所、当時のインドの困難な事情を検討している箇所(Part P-R)、具体的な図書館業務について部署ごとの解説をする箇所(Part S-Y)に大別される。

6. ランガナタンの教育観

6.1. ランガナタンの教育の定義

ランガナタンは教育を次の様に定義している。

「(教育の目的は) 共同体の各人が自らの得意分野の創造的能力を解放し、自らの手法でその力を発揮するようにすること」⁵

ランガナタンはこのように人間一人一人が持つ個性や特性に重きを置いて、その能力を發展させ本人の潜在力を覚醒させてその力で人類社会をさらに發展させる、と考えている。特筆すべきは、共同体における個人の固有能力の發揮を重視している点である。

また次の様にも述べている。

「(教育とは、) (予測のできない) 未来の未

スローガンのもとに、旧来の教師中心の画一的、注入主義的教育を批判し、児童の生活、活動、興味を中心にした教育課程、教育方法を試みるという共通の性格をもっている。」

JapanKnowledge Lib.所収、日本大百科全書(ニッポニカ) 三原芳一による

<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000122231> (参照:2016-01-30)

⁵ S.R. Ranganathan, *New education and school library*, p.35.

知の問題に対して、よくても一般的で柔軟に対応する能力の訓練をすることくらいしかできない」⁶

「新しい（教育の）見方によると、正規の学校教育で行われる教育の内容は、次から次へと刊行される図書資料の助けによる、一生涯続く自己教育の方法を生徒に教える事が中心になるべきである。」⁷

これは具体的に言うと、内部知識を鍛えるだけではなく、参考図書という「外部記憶媒体」の使い方を覚え、これら図書の利用を習慣化し、どこに必要な知識があるかを体得することである。これにより科学発展と世界の変化により、覚えなくてはならないことが刻一刻と累積していく中、解決手段や答えを自分で発見することを可能にするのである。

学校教育のカリキュラムは、時代が下れば下るほど教えねばならない知識、技術が多くなり、過積載、つまりいわゆる詰め込み教育になりがちとなる。この考え方は爆発する知識と情報に対する対処法として提示されている。

以上の考えをまとめ、学校図書館を使うという観点で教育を次の様に定義している。

「教育とは、

1. 記憶トレーニングではなく、学校図書館の活用による、外部記憶装置の使い方トレーニングであること
2. 同じスピードで、同じことや情報を学ぶような大人数の斉授業ではなく、学校図書館の活用による、個人の興味関心を自分のペースで学ぶような個人指導学習であること
3. 受動的に、抑圧的に、孤独に、部分的な内容を学ぶのではなく、学校図書館の活用により、活動的に、実験的に、創造的に、そしてグループ学習的に広い分野を学ぶ

ものである。」⁸

6.2. ジョン・デューイからの影響

前節で示したランガナタンの教育観は、アメリカの教育学者であるジョン・デューイ(John Dewey, 1859-1952)から大きな影響を受けている。デューイの『学校と社会(School and Society)』にて解説される学校図書館像を取り上げ、これこそ教育問題を解決する処方箋であるとしている。ランガナタンの考えは次の通りである。

民主主義の発展に伴い、一般（義務）教育が19世紀から進展した。これに伴い、ある時点から急激に教育というものは大人数を一齐に教育するという形になった。個体差を考慮しない教育は、多くの落ちこぼれを生み出し、能力がある子どもを飽きさせるという結果をもたらした。

この問題を解決するために、教育のスタイルを、子ども達は学校の各種の実践の場にて得た知見・経験を、学校の中心にある学校図書館に集まって来て、そこで図書を読み、ディスカッションや教諭への質問によって、より学びを深める、という形にすべきであるとする。

『学校と社会』における学校図書館の説明は、次の通りである。

「中央は、すべてが図書室に、すなわち、実践的作業に伴う問題の解明に役立ち、その作業に意味と教養的価値を与えるために収集されたあらゆる種類の知的資料に、集まってくる様子を示している。もしこの図の四隅が実践というものを象徴しているとすれば、その内部の中央部は、この実践的活動の理論というものを象徴しているのである。(中略)

(図書室は) それは、子どもたちが、経験したことや問題や疑問や自分たちが見つけた具体的な事実やらをもちこんでくる場所であり、また、それについて議論がなされ、その結果、それらに対して、新し

⁶ ibid., p.43.

⁷ ibid., p.46.

⁸ ibid., p.108.

い光が、とりわけ、他の人々の経験、積み上げられた世界中の知恵—図書室に象徴されているものであるが—というものからの新しい光が投げかけられる場所なのである。」⁹

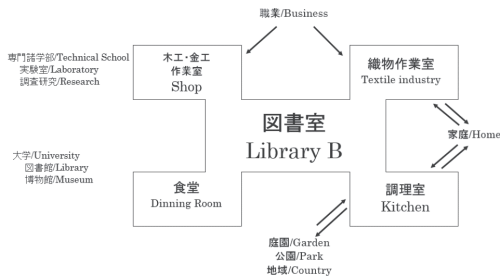


図2 学校の中心にある図書館¹⁰

7. ランガナタンの学校図書館思想

7.1. ランガナタンの考える学校図書館

ランガナタンの考える学校図書館を「学校図書館とは何か?」、「学校図書館の機能とは何か?」、「学校図書館の構成要素とは何か?」の切り口でまとめると以下の通りである。

(1) 学校図書館とは何か?¹¹

- ・外部記憶装置の使い方、つまり参考図書の活用方法をトレーニングする場所
- ・個人の興味関心を自分のペースで学ぶような個人学習の場であり、個人的な指導を受けることができる場所
- ・蔵書によって活動的に実験的に創造的に(ある特定の分野に特化するのではなく)広い分野を学ぶ場所であり、またグループ学習的に学ぶ場所

⁹ ジョン・デューイ著; 毛利陽太郎訳『学校と社会』, 明治図書, 1985, pp.112-116, 219 p.

¹⁰ John Dewey, *School and Society*, *John Dewey, The middle works, v.1: 1899-1924*, Southern Illinois University Press, 1976, p.49, 456 p. 邦訳: ジョン・デューイ著; 毛利陽太郎訳『学校と社会』, 1985, p.112.

¹¹ S.R. Ranganathan, *New education and school library*, p.108.の教育の定義を、学校図書館の性格の面から筆者が再編し、まとめなおした。

(2) 学校図書館の機能とは何か?¹²

- ・生徒を読者(本を読む人)に変える。
- ・生徒に読書の習慣、そして図書館を利用する習慣をつけさせる。

(3) 学校図書館の構成要素とは何か?¹³

- ・図書館資料
参考図書、様々な分野の解説書、伝記や旅行といった情報源になる図書、娯楽の図書、感動や靈感を与える図書(精神世界、芸術、文学等)
- ・人間
生徒、教諭、学校図書館司書
- ・図書館施設と什器
書庫、開架式閲覧室、グループ学習室、カウンター、(ほか窓・通路・空調・美観等の説明あり)

7.2. 学校図書館司書の仕事¹⁴

ランガナタンは学校図書館司書(School Librarian)の仕事を次の様に列挙している。

- ・選書
- ・亡失本の管理
- ・時折使われる、より専門的な資料の準備
- ・広報活動
- ・全ての生徒にその生徒の本を、全ての本に生徒の読者を(の実践)
- ・各科目の教諭からの本の要望への対応と連携
- ・適切な本を供給することで教室での授業を活性化させること

学校図書館では、以上のような仕事を果たす学校図書館司書が、最も独特で責任のある仕事であるとしている。この地位を保持するためには、校長を味方につけ、国内の影響力の強い図書館員の後援を得るだけではなく、その人の熱意や精励さが加わらねばならない。また学校図書館司書の資格と待遇について

¹² *ibid.* p.115.

¹³ *ibid.*, pp.116-168.

¹⁴ *ibid.* pp.148-156.

も言及している。学校図書館司書は、図書館の本を簡単に読むことが可能であるだけでなく、スタイルや信頼性といった基準に基づき正しく本を評価することができねばならない。また教諭と比べて学歴でも同等であること、最低限学士の学位は持っている必要がある。学校図書館の仕事は多岐にわたるので、各人の専門を持つのと同じ程度に、バランス良い知識と技術が必要である。そして教育学の学位を併せ持つ必要がある。

これだけの人材を学校図書館に置くためには、高い待遇を施さねばならないとも言う。このためには高い志を持つ政治家や学校行政担当者が必要であるとしている。

7.3. 学校図書館司書の組織化¹⁵

ランガナタンは、学校図書館司書の組織化を訴えている。近隣にある 20 校程度の学校で 1 グループとし、その単位ごとに中央館を設定する。その中央館には、受入、分類、目録といった図書館業務を集約化し、そのグループの統括司書 (chief librarian of the Central Library for schools)がその作業に当たる。統括は、年間に最低でも 2 回はグループ内の学校図書館を巡回し、現場の学校図書館司書と問題を協議し、サービスを向上させるように努めるようにする。

7.4. 学校図書館での実践¹⁶

学校図書館で行うべきことを、ランガナタンは大きく分けて次の 3 点を挙げている。

- (1) 図書館を利用する習慣と利用マナーの植え付け
- (2) 授業のフォローアップ
- (3) 読書指導 (パラレルリーディング：並行読書、読書日記)

(1) 図書館を利用する習慣と利用マナーの植

え付け¹⁷

ランガナタンは、生徒に学校図書館を慣れ親しませるため、来館した生徒には、様々な資料があることやそれらの使い方を教えたりせねばならないと言う。また、本の取り扱い方、章や節、段落といった本の構造なども教えるべきである。また、学校図書館に関するテストを時折やるべきである。

また辞書の使い方、図書分類の構造、目録や書誌の使い方とも丁寧に教えるべきとしている。そしてノートを取り方も同様である。ほとんどの生徒は、ノートを取る必要性が分からず、自己改善ができずに誤った方法でノートを取っている。これに対して学校図書館司書は、長い時間をかけて指導の支援をしていくべきとしている。

このノートに関しては、内容の質、書かれている内容の妥当性、省略記号の一貫性、自分の言葉の比率、書誌情報の詳細の五点を基準に評価する。¹⁸

次に利用マナーであるが、図書館が公共的な存在であり、他者との共用施設であることを教えて、本を大事にするようにさせる。また子ども同士で、本の扱いについて注意させあうことも有益だとしている。一例では、よく来館する姉弟について、弟が本を壊そうとすると姉がしつける、といったことが挙げられている。

特に子ども時代に、図書館でのマナーを形成しておくことが重要であるとしている。例えば、図書館の本を壊す、隠す、窓から唾を吐く、行列に並んで順番を待つことができない、図書館の床に座り込んで図書を広げる、図書館でタバコ、など様々なマナー違反が大人の図書館利用者に見られる。大人は注意しても身につかないことが多いため、子ども時代に学校図書館がマナー指導することで、このような利用者を減らすべきであると主張する。

図書館の使い方やマナーについては、達成

¹⁵ ibid. pp.157-160.

¹⁶ ibid. pp.173-264.

¹⁷ ibid. pp.173-179, 228-239, 252-262.

¹⁸ ibid. pp.174-175, p.246, p.263.

度テストを行うことを推奨している。○×式や穴埋め式の例題が、この『新教育』に出ている。

(2) 授業のフォローアップ¹⁹

生徒には、授業の予習のため、関連する図書を学校図書館で探し集めさせる。しかし生徒は、自分の力で関連図書を探すことは難しいので、教諭と学校図書館司書が誘導しなければならない。しかし誘導も度が過ぎると、生徒は自発性を失い、ただ課題を言われたまま行うのみになってしまう。その解消のため、班別で活動させる。課題を細分化し、班内でそれぞれ担当を決めて、調べさせるのである。

このフォローアップでは、

1. 補足的な事実やデータをさらに調べること
2. その主題の図書をさらに読ませて、完全なイメージを作らせること
3. その分野の著名人の伝記や、良く知られている人の業績を読ませること

を生徒に取り組ませるとしている。フォローアップでは、全てを教えないことが大事であると説く。

(3) 読書指導（パラレルリーディング：並行読書、読書日記）

ランガナタンは、授業に関係する図書を、並行して読むというパラレルリーディング(Parallel Reading：並行読書)を推奨する。これは義務ではなく、本人の能力と興味関心にしたがって行わせるものと位置付けている。学校図書館司書の役割としては、この並行読書が充実するよう関連する本を選書するほか、生徒の要望に応じて他の図書館から借りるようなこともする。また図書館の一角に関連図書をまとめたコーナーを設置する。²⁰

この並行読書において、教諭は授業での指

導と異なり、インフォーマルな形で生徒を指導する。その際に活用されるのが読書日記である。ランガナタンによると人間の記憶は不安定であるので、読書から学んだ成果を記録するべきとする。読書日記は、次の三種類を生徒に作らせる。²¹

1. 事実発見や調査の読書日記 (fact finding diary)
2. 娯楽本の読書日記 (diary for recreative books)
3. 感動した語句の日記 (diary for inspirational passages)

この読書日記については次節で詳しく紹介する。

8. 3つの読書日記

8.1. 事実発見や調査の読書日記²²

生徒は、学校図書館司書の指導の下、参考図書やその他の図書から、事柄の調べ方を身につけねばならない。クイズのような問題（「私を探して(Find me out)」）を学校図書館司書が作成し、それを解かせる。一度に様々な分野でクイズを行わず、数分野のみに限定して行うべきである。『新教育』では、サンプルの問題例が出ているほか、生徒に問題を作らせ、相互に問題を出し合うことも効果的であると述べている。

そして、調べたことを「事実発見や調査の読書日記」に記載する。記載する項目は次の通りである。

1. 分かった事柄
2. 分かった事柄が出ていた図書の著者、タイトル、正確なページ数
3. その図書に至るまで調べた資料
4. かかった調査時間

²¹ ibid. pp.213-216.

²² ibid. pp.197-201, 217-218, 221-223, 251-253.

¹⁹ ibid. pp.192-193.

²⁰ ibid. pp.190-191.

このルールを守って、継続して日記をつけさせるという。この日記を楽しく継続させるためには、先に述べたようにクイズを図書館の時間で活用することを紹介している。この日記は、学校図書館司書が定期的にチェックをするべきである、とも言う。このチェックは、生徒が書き方を誤っていないか、主題からそれた内容を書いているか、書誌情報を正確に記録しているか、等の観点で行う。

また同じく重要であるのが、この日記の情報を元に時折テストをすることである。テストにより、生徒の見落とししていた点が浮き彫りになる。全員一人一人テストをするのは現実的ではないので、小グループに分けて、行うのが望ましい。加えて生徒の調査の経緯も確認し、適宜それについて助言をすることも大事である。

次に、この読書日記を元にエッセイを書かせることも紹介している。しかしエッセイを授業で書かせるということは、大抵の生徒にうんざりするものというイメージがある。そのため生徒達に、発見や気づきを多くするため書く、という目的を説明し、学校図書館で書かせるようにすると良い、と述べている。

加えて一歩進み、1年に一度論文を書かせるという。エッセイは一時間で書かせるが、この論文には1年を与える。生徒たちは事項調査日記で集めた内容を、一層深く調べ理解し、論文にまとめることで、知識の定着をはかることができる。

しかしこの授業は難しいので、素質ある生徒のみが可能であり、必修ではなく選択的に課すべきであるともしている。目的は、課題を強制することではなく、生徒の資質の開放と、本人が楽しむことである。

この課題に取り組んだ生徒のモチベーションを上げるため、論文コンテストを行い、表彰するといった実践も紹介している。ランガナタン自身が、マドラス図書館協会で「読書週間コンテスト(Reading Habit Competition)」というイベントをやっていた事例も紹介されている。このような取り組みをすることで、目的を持った読書(purposive

reading)を促すのである。

8.2. 娯楽本の読書日記²³

娯楽本もただ読んで楽しんで終わるのではなく、記録を取り、有益な読書経験にできるようにする。娯楽本の読書日記には、次の項目を記録する。

- 1.読み始めた日
- 2.読み終わった日
- 3.読み終わるまでにかかった時間の見積もり
- 4.著者名
- 5.タイトル
- 6.出版年
- 7.合計ページ数
- 8.出版社名
- 9.新しく学んだ単語、語句、言い回し(学生時代、言語の学習は絶え間なく、様々な科目を学ぶ時も同時に行われている。)
- 10.その本の要旨:3文以内で書く。
- 11.もしあれば印象的なイラスト
- 12.その本が戯曲か小説であれば、一番印象深い登場人物

この日記についても、時折チェックをするべきである。特に9の単語、語句、言い回しについて確認すると良い。そしてこれらの言葉を使った文章を書かせる。12についても生徒が選んだ登場人物について、選んだ理由をさらに答えさせる。これらのチェック作業は、学校図書館司書か教諭のどちらかが行う。

この娯楽書の読書をより有益なものにするために、要約、ディベート、ドラマ化を生徒に行わせることを推奨している。要約は、言語能力の発達を促す。この要約を課すために、簡単に要約でき、生徒の興味関心が向くような、授業と関係ある本を教諭と学校図書館司書が準備しなくてはならないとしている。

²³ ibid. pp.202-205, p.219, pp.224-225, 254-255.

ディベートは、テーマを指示し、話す側と見ている側の生徒を選ぶ。一定の時間で学校図書館にある本から、二つの立場の疑問を投げかける。時間中は、読書日記を使うことを許す。

ドラマ化は、グループで一冊の図書を選び、それで劇をやるというものである。通常の小説や戯曲に限定する必要はない。

8.3. 感動した語句の読書日記²⁴

この日記で念頭に置いているのは、詩集や箴言集などの文学作品、そして歴史書や宗教書などである。ランガナタンによると、これらの図書に生徒が触れることは「大宇宙の真理と一体である自己」を経験することができる、非常に重要な人間形成体験であるとしている。学校図書館司書が適切なタイミングで、図書を通した感化を行い、生徒は「永遠の瞬間」を感じる経験をする。生徒が今後の人生を送る上で、霊的に成長することが大事であるため、この仕事は学校図書館司書にとって、中心的な仕事の一つであるとしている。これらが可能となるように、学校図書館司書は、十分な箴言集等の関連資料を選書しておくべきである。

この日記も定期的に、生徒の感想や所見、刺激を受けたこと等、書かれた内容を検証し精査する。この日記については、次の事項を書く。

- 1.最も感銘を受けた句や節
- 2.何故その句や節に感銘を受けたかの理由
- 3.その図書に至るまで調べた資料
- 4.その本の書誌情報など（事実発見や調査の読書日記で挙げたものと同じ）

これらの本をより楽しめるようにするには、まず朗読を挙げている。朗読が苦手な生徒も居るので、合唱も適宜取り入れる。

また生徒が好きな言葉を選びノートすることで、本人にとってのかけがえのない箴言選

集が完成するという。中には大規模な箴言集を完成させるような、能力を持つ生徒が稀に現れるという。このような生徒は単なる選集ではなく、表紙・目次・インデックスがついた箴言集を完成させるという。

9. 所見

ランガナタンの教育観及び学校図書館観は、現在国策で進められている能動的な自発学習であるアクティブラーニングの議論に似ている。このことについては、拙稿「New Education」で指摘した。一方、本稿では、学校図書館司書の仕事と資格要件、そして学校図書館での実践についてまとめた。学校図書館法の一部改正（平成26(2014)年6月26日公布）により、学校図書館司書を各学校に置く努力が必要となったが、今後、司書を補充していく際に、このランガナタンの主張は、一定の指針になると考えられる。

一方、ランガナタンの主張が、現在の日本の教育現場から見ると非常に理想論に見えてしまうことも否めない。7.2で述べた学校図書館司書像は、資格要件にしても待遇にしても現状と大きく乖離している。小中高教諭と学識と学歴、そして待遇が並ぶ学校図書館司書ということは、正規採用の職員を示すと考えて良い。加えて『新教育』が書かれた1960年代のインドでは、大学卒というステータスは、非常に高学歴だったことが推測できる。現代の日本では修士や博士の学位を持つ程度に考えられる。そのように資格要件を考えるとさらに理想論である、と言わざるを得ない。

しかしランガナタンやデューイが考えたような、学校を中心にしてアクティブラーニングの場所としての学校図書館を運営するには、資格要件をただの理想論と片付けてしまうには短絡的すぎる。逆に国策で教育改革を進めるためには、学校図書館司書の資格要件と待遇、そして学校図書館施設の充実化に大きく力を入れねばならないと考える方が自然である。ランガナタンは、学校図書館司書が行う業務として、一般的な図書館業務の他に生徒の教育や人間形成にかかわることを多数挙げ

²⁴ ibid.pp.206-208, p.220, pp.226-227, p.256.

ているが、これを実現させるため、これまでの学校図書館司書観を変え、一種の教育職であると位置づける必要があるのではないであろうか。

もちろん国の財政の悪化もあり、教育予算を増やせと声高に主張するのも難しい。一方ランガナタンは、学校図書館司書の人件費等を試算しつつ、業務縮約化による効率化も主張している。この案を実現できないであろうか。

まずは地域のレベルで学校図書館の業務の集約化(受入、目録、分類、情報管理を中央館に集約)を進め、少ない予算での効率的な協働運営を行うのである。既に公共図書館や大学図書館では、分担目録のネットワークである書誌ユーティリティの実現で、目録業務の負担が大きく軽減し、その結果、どこの図書館にどのような本を所蔵しているかが、高い精度で調べることが可能になった。それと比較すると学校図書館は、未だ着手できることが多いと感じる。

今こそこれらの経験を活かし、学校図書館の世界でも集約化を実現すべき時ではないか。教育のアクティブラーニング化という改革が、学校図書館に現在チャンスを与えているのではないかと考える。

最後に私見である。4.4.に書いたように、ランガナタンは業務の効率化を進め、その空いた時間をレファレンスに充てるべきだ、と主張している。以上のような学校図書館の地域統合運営と業務集約化が実現すれば、空いた時間で生徒の教育に一層時間を割くことができるようになる。

学校図書館で生徒の自律的な探究学習が実現すれば、大学に進学後、急に図書館が巨大になり、それを活用した自学自習が基盤になることに戸惑うことも減ると考えられる。それにより、いわゆる転換教育にのしかかる重荷が軽減されると考えられる。大学で起きている問題の一部は、小中高に起源があり、それを解消することで大学も本来の研究教育に専念できるようになるのである。

10. おわりに

今回、学校図書館での実践論を可能な限りまとめて紹介したが、これは小中高の課題のみならず、大学でも十分活用できるものと作成中に感じられた。(ということは、小中高の生徒に課すには少々レベルが高い課題であるのかもしれない。)学校図書館現場のみならず、様々な教育現場で活用して頂ければ望外の喜びである。

琉球大学附属図書館大谷周平様、同教育学部望月道浩先生のお二人に、本稿作成の機会を頂いたことを感謝して、筆を置く。

【参考文献】

○『五法則』について

原著：S.R. Ranganathan, *The Five Laws of Library Science*, 2nd ed., Bombay: Asia Publishing House, c1963, 449 p.

訳本：S.R.ランガナタン著；渡辺信一、深井耀子、渋谷義行共訳『図書館学の五法則』日本図書館協会, 1981.9, 425 p.

抄訳：ランガナタン [著]；竹内哲解説『図書館の歩む道：ランガナタン博士の五法則に学ぶ』日本図書館協会, 2010.4, 295 p.

○教育観と学校図書館観について

S.R. Ranganathan ; assisted by P. Jayarajan, *New education and school library*, (Sarada Ranganathan Endowment for Library Science series, 4), Ess Publications for Sarada Ranganathan Endowment for Library Science, 2006, c1973, 510 p.

S.R. Ranganathan ; with a foreword by John Sargent, *School and college libraries*, (Madras Library Association. Publications series, 11) , The Madras Library Association , Edward Goldston, 1942, 432 p.

ジョン・デューイ著；毛利陽太郎訳『学校と社会』, 明治図書, 1985, 219 p.

よしうえ しょうえい：東北大学附属図書館
情報サービス課参考調査係